

ガンビア川中流域におけるイネ品種の短期的動態

平成 17 年度入学
派遣先国：ガンビア
片山 祐美子

キーワード：ガンビア川流域, 稲作, 品種, 用益権者

対象とする問題の概要

ガンビア川流域では、古くから男性による雑穀栽培と女性による稲作を基幹とした農業が営まれてきた。この地域の降水量は年較差が大きく、穀物の収穫量は大変不安定である。調査を行なったガンビア川中流域の村では、降水量の変動による影響を最小化すべく、男性は耐乾性の異なる数品種の雑穀を組み合わせて栽培し、女性も多品種のイネ（すべてアジアイネ（*Oryza sativa* L.））を栽培していた。

しかし、人口密度が非常に高い調査村において開墾可能な土地はほとんど残っておらず、穀物自給率は 3 割程度にとどまっている。



写真 1. 多雨のために苗が流され低収量となった水田



写真 2. 共同耕地で収穫されたコメを家へ運搬

研究目的

これまでの調査から、以下の 2 点が明らかとなっている。

- 一筆あたりのイネ品種数は、シンキロー（複数世帯からなる共食の単位（以下、共食集団とする））で保有される水田（以下、共同耕地とする）より個人保有の水田（以下、個人耕地とする）で多い。
 - 新品種は個人耕地に導入されることが多く、共同耕地ではポピュラー品種が栽培される傾向にある。
- これらは、個人耕地においてポピュラーでない品種を多品種栽培し、信用度の高い品種を共同耕地で

栽培することで、主な消費単位である共食集団の食糧確保を図る女性たちの農業実践を示唆するものである。

そこで本研究では、これを裏付けるため、2005年～2008年の調査結果をもとに、共同耕地、個人耕地それぞれにおける栽培品種の変遷を明らかにすることを目的とする。

フィールドワークで得られた知見

2005年から2008年の4年間、17の共食集団に属する水田において栽培されているイネ品種について収穫期に参与観察を行なった。各共食集団が利用する共同耕地において、調査期間中に新たな品種の導入を経験した共食集団は約25%であった。そのうちの75%は、個人耕地への導入後に共同耕地へ新品種を導入していた。栽培品種の減少を経験した共食集団は約30%、4年間継続して同じ品種のみを栽培していたのが約60%であった。

一方、17の共食集団に属する51人の女性が利用する個人耕地についてみると、約半数の女性が新たな品種の導入を経験していた。また、品種の減少は約60%、同じ品種のみを栽培していたのは30%のみであった。このように、栽培品種の変動は個人耕地で大きく、共同耕地では6割もの共食集団が同じ品種のみを栽培していることがわかった。

次に、新品種の導入を決めた動機を聞き取った。その結果は、共同耕地、個人耕地ともに、水不足や過剰な降雨によって低収量となってしまった、または種籾さえ収穫できなかった品種への代替として、他村への知人訪問や共同労働などで偶然手に入れた、といった非積極的な理由がほとんどであった。また、栽培していた品種を栽培しなくなった動機については、より良い品種の栽培面積を拡大させるため、水不足による種籾の入手失敗など、直接収量にかかわる理由であった。

以上の結果から、比較的消極的、受動的な理由から栽培品種の変化が起こっているようであるが、女性たちが共同耕地と個人耕地をうまく使い分けながら、共同耕地における食糧確保を図っているという既述の農業実践が支持された。



写真 3. プロット内にみられる

3 品種のイネ

今後の展開・反省点

イネ品種を取捨選択する際の主要因でありうる収量の継続的データが足りず、女性たちの農耕戦略が描ききれていない。今後は、共同耕地、個人耕地の両方で栽培品種の収量データを集めるとともに、長老などへの聞き取りから中期的な栽培品種の変動もみていきたい。